

## 「かけす」

山国の空のあんな高いところを  
二羽三羽 五羽六羽と  
かけすの鳥のとんで行くのが**じつに秋だ**

あんなに半ば透きとおり  
ときどきは ちらちら光り  
空気の波を おもたくわけて  
**もう二度と帰って来ない者のように**

**かけすという仮の名も  
人間との地上の契りの夢だったと  
今はなつかしく 柔らかく  
おりおりは たぶん低く啼きながら**

ほのぼのと 暗み 明るみ  
見る見るうちに小さくなり  
深まる秋のあおくつめたい空の海に  
もうほとんど消えてゆく……

※冒頭部繰り返し

### 【多田武彦氏が1989年に書いた文】

昭和48年、17年ぶりに郷里の大阪に帰った。  
3年ほど作曲から遠ざかっていたが、久しぶりに関西学院グリークラブのために新曲を書くことになって、詩集を探しに出かけた。

恥ずかしいことながら、尾崎喜八先生の詩と出会ったのは、このときがはじめてである。

彌生書房から出版されているこの詩集の巻頭。原稿用紙に書かれた「かけす」が掲載されていた。

尾崎先生の詩に作曲しようと思ったのは、この「かけす」との出会いによると言ってよい。

(※この曲が一番大事とおっしゃった風間氏の言葉を思い出す。)

読む者の心に、清新な感動を伝えてくれる先生の詩には、同時に「何気ないけれど、尾崎先生が用いると、きらりと光る言葉」がある。

《とんで行くのが》

《おもたくわけて》

《深まる秋の》・・・

歌曲や合唱曲の作曲にあたっては、詩の心に逆らわないように、寄り添うように、これをおこなうことが大切だが、要所要所にちりばめられた詩人特有の言葉の輝きも見落としてはならない。

尾崎先生の詩には、自然な姿で、美しい日本語が配置されていたので、充実した心で作曲できたことを思い出す。

「作者自身が自分の詩に注釈を施し、或いはその出来たいわれを述べ、又はそれに付随する心境めいたものを告白して、読者の鑑賞や理解への一助とする試みである。」

「かけす」はこの「自註 富士見高原詩集」にも収められ、次のような自註が施されている。

秋もようやく深くなると、日に幾たびか空の高みをカケスの群れが南のほうへ飛んで行く。

南の何処へ行くのかは知らないが、とにかくこの高原を後にして、今まで一緒に暮らして来た私たちを後にして、われわれの知らない土地へ行ってしまう。私にはそれが寂しかった。

ふだんよりも遥かに高いあんな空を飛んで行くのだから胸の痛む思いがする。

誰がどういう訳でカケスと呼んだか語源の程は知らないが、とにかくにもその名で呼ばれて、自分でもその気になっていたかも知れない者が、どうにも出来ない本能か運命のようなものに導かれて、おそらくは半ば心を残しながら、遠く去って行くのだと思うと、私には彼らが単なる鳥としては見られない。むしろ何か霊的なものに見えてくる。

## 【富士見高原とかけす】

富士見高原は八ヶ岳連峰東南の裾野に伸びやかに広がり、海拔 1000m、冷涼な気候と豊かな自然に恵まれた山国で、東南方向にはるかに富士山を望みつつ、甲斐駒ヶ岳、釜無山（かまなしやま）、そして多くの種類の蝶が生息し、スズランが群生することで有名な入笠山（にゅうかさやま）などを遠からずひかえた景勝の地である。

**カケス**は、日本では九州以北の平地、山地の森林に生息し、北部に生息するものは冬季に南に移動する。

体長は 30cm ぐらいで、だいたい鳩と同じ程度の大きさである。

「**カケス**は夏の暑い頃まではときに私達の頭をかすめるぐらい低いところを飛んでいます。

けれども秋の気配が立ちこめるにつれて、**カケス**の飛ぶ高さが少しずつだんだん高くなるのです。

尾崎先生がかけすの詩を詠まれた秋の深いころになると、**カケス**はもう点にしか見えないぐらい高いところを飛び、三羽、五羽と連れだって南の方向へ去っていきます。」

秋の富士見の空はあくまで清澄で、蒼く、高い。その空の高みを、二羽三羽、五羽六羽とだんだんに飛び立っていく。

ソロ部分 「やまぐにのそらの あんなたかいところを」の「たかい」の部分でF音（フェルマータ）で表現されているが、このところは富士見の空のように透き通るような、突き抜けるような、澄み渡るような高い響きの声で歌いたいですね。



かけす

